

きむらただふみ 木村雅史

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 303 号
学位授与年月日	平成21年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	E. ゴフマンの『フレーム分析』による多層的現実論の展開 —相互行為秩序分析の基礎視角—
論文審査委員	(主査) 教授 正村俊之 教授 吉原直樹 教授 長谷川公一 教授 木村邦博 准教授 永井彰 准教授 下夷美幸

論文内容の要旨

現代社会を生きる私達の周りには、「メディア」が溢れている。それぞれのメディアには、それぞれに固有な経験の形式があって、私達は、新しいメディアが登場するたびごとに、新しい「メディア経験」とでもいうべきものを獲得していく。やがて、そのメディア経験も、いつの間にか当たり前の経験として自明化していく。しかし、新しいメディア経験は、既存の私達の経験に浸透し、私達の経験の有り様や、その社会的意味自体を確実に変容させてしまっている。

新しいメディア経験の登場が、いかに人々の行動や振る舞いに影響を与え、変化させてきたのか。そして、このことがもつ社会的意味は何か。こうした問いは、メディア論において基本的、かつ重要な問いのうちの一つである。こうした問いに答えるためには、対面的相互行為とメディアを介したコミュニケーション、あるいはメディア経験(演劇、映画鑑賞、小説、マンガの読解、ラジオを聞く等)等、様々な経験領域の相互的な影響関係を記述し、分析する枠組みが必要になる。

対面的相互行為領域に関し、独自の理論を構築した社会学者にアーヴィング・ゴフマンがいる。彼は、生の身体と五感を介して、現前し合っている人々が、双方向的に情報をやりとりし合う経験領域、すなわち、対面的相互行為領域を、固有の認知メカニズムや規範をもった領域として設定し、そうした認知メカニズムや規範をマクロな社会構造(あるいは、社会秩序)にも個人の意図や動機にも還元することなく記述、分析し、「相互行為秩序分析」という独自の方法論を確立した。

こうしたゴフマンの分析、その含意を踏まえた上で、彼の相互行為秩序分析、その含意を対面的相互行為以外の経験領域へも適用していくことで、メディアがいかに人々の行動や振る舞いに影響を与え、変化させてきたのかという問いに答えようとする試みが存在する。たとえば、ジョシュア・メイロウィッツは、『場所感の喪失』のなかで、ゴフマンの「状況論」とマクルーハンの「メディアウム理論」、それぞれの欠点を相補的に埋め合わせることで、「二つのコミュニケーション・システム [= 対面的相互行為とテレビ視聴におけるコミュニケーション・システム] を二分法的にでなく、連続体的に扱う」統合的なモデルを提示した。こうした立場設定のもと、メイロウィッツは、対面的相互行為領域に縛られたゴフマンの相互行為秩序分析の含意をうまく汲みとりつつ、そうした分析を対面的相互行為領域以外の経験領域や、そこで行われるコミュニケーションへも適用するという—いわばパラドキシカルな—作業をやったのけてみせる。

具体的には、メイロウィッツは、一九六〇年代アメリカにおけるテレビの登場が、人々の行動や振る舞いに対してもたらした影響に焦点を当て、「三つの一般的役割カテゴリー」、すなわち「集団感情（集団的アイデンティティ）」、「役割移行（社会化）」、「権威（ヒエラルヒー）」の変化を分析の俎上にのせていく。メイロウィッツは、テレビ視聴というメディア経験の登場、それによって対面的相互行為領域に起こった表局域と裏局域の曖昧化という相互行為秩序上の変化を、六〇年代アメリカで起こっていた伝統的な集団的アイデンティティの喪失、社会化、役割移行過程の不鮮明化、伝統的な権威の失墜というマクロな社会変動の分析と結びつけた。加えて、メイロウィッツによれば、こうしたマクロな社会変動は、社会的な意味世界に対しても、大人と子ども、あるいは親密圏と公共圏の境界の曖昧化という帰結をもたらした。しかし、その際、メイロウィッツは、こうした帰結をテレビ視聴というメディア経験が、相互行為秩序、および、それに立脚したマクロな社会構造を破壊した事態としてしか描かない。

しかし、テレビ視聴というメディア経験が、相互行為秩序に影響を与えることで、新たに、以前の相互行為秩序とは区別されるかたちで、新しい相互行為秩序が、創出され、意味づけられる可能性はないのか。メイロウィッツが描き出した「複数の社会的状況の融合（＝テレビ視聴というメディア経験と相互行為秩序との接触）」という現象を、ゴフマンの考え方に沿って忠実に再解釈するのなら、それは既存の相互行為秩序の単なる破壊ではなくて、新しい相互行為秩序の再形成として捉え直されなければならない。メイロウィッツが描き出した「複数の社会的状況の融合」は、おそらく、それと同時に生じているであろう「複数の社会的状況の再分化（＝テレビ視聴というメディア経験と接触することによる新しい相互行為秩序の再形成）」の側面を見てこそ、その社会的意味を十全に理解することができるのではないか。新しい相互行為秩序を描きだす、こうした枠組みを構築していくことができれば、その枠組みは、メイロウィッツの研究の盲点をちょうど補完するような枠組み、すなわち新しい集団的アイデンティティの形成、社会化、あるいは役割移行過程、権威の誕生を描くような枠組みになるはずである。

ゴフマンの後期の著作である『フレーム分析』は、対面的相互行為を初めとした様々な経験領域を分析の俎上にのせ、それぞれの経験領域のなかで認知される社会的現実に関して体系的な考察を加えた著作である。加えて重要なのが、『フレーム分析』が、それぞれの経験領域を構成する認知メカニズム、そのなかで認知される社会的現実を記述する際に、それぞれの認知メカニズムに共通する特性と固有な特性の両者を記述するという方法をとっている点である。こうした方法をとることで、様々な経験領域間の相互的な影響関係をも問題にすることができるようになる。しかも、『フレーム分析』の論理に沿えば、対面的相互行為領域は、常に他の経験領域との相互的な影響関係へと開かれてありつつも、やはり固有の認知メカニズムと規範をもった領域として、他の経験領域から差異化される。こうした枠組みは、まさにメイロウィッツの問題提起を引き受けつつ、彼が描かなかった部分に焦点を当てていく際、非常に

重要な視角となってくる。

メイロウィッツ的な問題提起を引き受けつつ、彼が描かなかった部分に光を当てるためには、まず、他の経験領域からの影響を踏まえつつ、対面的相互行為に固有な認知メカニズムや規範について捉え直していく視角や、そうした視角のもとに準備された分析枠組みを抽出する作業、すなわち、『フレーム分析』を内在的に検討する作業が必要になる。『フレーム分析』には、その理論的諸源泉となっている幾つかの議論が存在する。それは、「フレーム」という発想をゴフマンに与えたグレゴリー・ベイトソンのフレーム論と、『フレーム分析』の問題設定に影響を与えたアルフレッド・シュッツの多元的現実論である。『フレーム分析』は、両議論を批判的に摂取することで、独自のパースペクティブや分析枠組みを得るに至っている。ゆえに、『フレーム分析』のパースペクティブや分析枠組みの特質や意義を考察する際には、ゴフマンが、両議論から何を継承し、かつ、両議論に対して、どんな新しい視角を付け加えたのかについて検討することが必要になる。

このような問題意識のもと、本稿では、以下の三つの課題を基軸に、『フレーム分析』の読解を行った。

- ①『フレーム分析』における社会的現実の認知に関する議論が、「相互行為秩序はいかにして可能か」というゴフマン理論にとっての基本的な問いといかなる関係にあるのかについて考察すること。
- ②ベイトソンのフレーム論とシュッツの多元的現実論、両議論と『フレーム分析』との差異から『フレーム分析』独自のパースペクティブや分析枠組みを析出すること。
- ③他の経験領域からの影響を踏まえつつ、対面的相互行為に固有な認知メカニズムや規範について捉え直す視角や枠組みを彫琢すること。

以下、この三つの課題に対応させるかたちで、本稿で行った作業、その意義について、1) ゴフマン理論における『フレーム分析』の意味の解明、2) 新しい「状況の定義」論—多層的現実論—の提示、3) 相互行為秩序の捉え直しへ向けた枠組みの析出の三点から整理していくことにしたい。以上の三つの論点が、先に挙げた三つの課題にちょうど答えるものとなっている。

まず、本稿の構成であるが、本稿は、『フレーム分析』読解のための前提的な作業である第Ⅰ部『『フレーム分析』の理論的諸源泉』と、『フレーム分析』読解、その意義についての考察である第Ⅱ部『『フレーム分析』読解』から構成されている。第Ⅰ部は、第1章「ゴフマンの相互行為秩序論」、第2章「ベイトソンのフレーム論とシュッツの多元的現実論」、第3章「トマスの『状況の定義』論」から成る。第Ⅱ部は、第4章『『状況的パースペクティブ』の基礎』、第5章『『状況的パースペクティブ』の展開』、第6章『『状況的パースペクティブ』による相互行為秩序論の展開』、第7章『多層的現実論としての『フレーム分析』』、そして終章から成る。

1) ゴフマン理論における『フレーム分析』の意味の解明

本稿の第一の意義は、『フレーム分析』が、ゴフマン理論の基本的な問い、すなわち、「相互行為秩序は、いかにして可能か」という問いといかなる関係にあるのかについて答えを与えたことである。

『フレーム分析』は、ゴフマン理論の基本的な問い、すなわち、「相互行為秩序はいかにして可能か」という問いといかなる関係にあるのか。ゴフマンの理論研究というパースペクティブのなかで『フレーム分析』を論じるときには、この問いに答えることが重要な作業となる。しかし、ゴフマン理論の問題設定の一貫性を強調するアン・ロールズやランドル・コリンズらの先行研究を検討してみても、この問いに対する明確な解答は与えられていない。こうした状況を受け、本稿は、第1章「ゴフマンの相互行

為秩序論」と第5章「『状況的パースペクティブ』の展開」において、相互行為秩序に関する代表的な研究である初期の相互行為儀礼論を取り上げ、それと『フレーム分析』の議論とがいかなる関係にあるのかについて考察した。相互行為儀礼論とは、デュルケームが『宗教生活の原初形態』で、伝統社会に対して行った儀礼分析を、現代社会の相互行為秩序領域へと適用し、そうした相互行為儀礼の記述を通して、現代社会においても、儀礼としての相互行為実践を通して、人々の「神聖な自己」という聖なるものが維持、再生産されている動態を描き出している議論である。

まず、第1章では、コリンズの議論に依りつつ、初期から後期まで一貫して維持されており、かつ後期において、より精緻化されているゴフマンの分析視角を「状況の参加者間に共有されている焦点を維持し、その焦点への配慮を発展させる社会的メカニズムの探究」として析出した。相互行為儀礼論において、「状況の参加者間に共有されている焦点」とは、相互行為儀礼に参加している人々の「神聖な自己」である。ゴフマンは、この相互行為儀礼論で、「敬意」や「振る舞い」、そして「敬意」の下位類型である「呈示儀礼」や「回避儀礼」といった儀礼実践が、この共有された焦点としての「神聖な自己」を維持、再生産していく仕組みを描き出している。対して、後期の『フレーム分析』において、「状況の参加者間に共有されている焦点」とは、「ここで進行していること」という「状況の定義」であった。

本稿は、相互行為儀礼論から『フレーム分析』まで維持されている分析視角をこのように析出した上で、『フレーム分析』で展開されている「人—役割図式」論を、相互行為儀礼論の前提（＝「神聖な自己」）に対し、その基礎づけをなす議論として位置づけた。「人—役割図式」とは、人々が「ここで進行していること」に関する認知を獲得していく過程において作動しているとされる他者認知のメカニズムである。「人—役割図式」論によれば、オーディエンスが、特定の状況のなかで演じられていくパフォーマーの「役柄 character」を複数の状況にわたって「拾い集め」ていく過程で、当のパフォーマーを固有な存在として特定する「人物 personality」の認知が獲得される。相互行為儀礼論において、人々の共通の認知的焦点として設定されていた「神聖な自己」も、当のパフォーマーを固有な存在として特定する機能をもつ。そのような意味で、「人—役割図式」論は、相互行為儀礼論のなかで、人々が儀礼的実践を遂行する際の前提として設定されていた「神聖な自己」が、いかに認知的に獲得されていくのかについて論じた議論として位置づけることができる。

2) 新しい「状況の定義」論—多層的現実論—の提示

本稿の第二の意義は、多層的現実論ともいうべき、「状況の定義」論における新しいパースペクティブ、すなわち、①各経験領域に固有な認知メカニズムと、②当の経験領域のなかで認知される社会的現実（＝「状況の定義」）の多層性との関係性を考察する視角を析出したことである。

『フレーム分析』は、その「導入」部が、トマスの公理批判から始まることから分かるように、ゴフマン独自の「状況の定義」論としても読解することができる。では、トマスとズナニエツキ『ポーランド農民』の「方法論ノート」を嚆矢とする社会学上の「状況の定義」論の系譜において、『フレーム分析』は、いかなる位置を占めているのか。「状況の定義」論として『フレーム分析』を検討した先行研究には、たとえば、トマスの「状況の定義」論と『フレーム分析』との関係性を、「状況の定義」の決定因を個人的要因に帰属させるのか、社会的要因に帰属させるのかという対立軸に重ね合わせ、「解釈」アプローチ vs 「状況」論というかたちで描きだすものが存在する。しかし、こういった解釈は、両議論の関係性をあまりに単純化して理解しているし、何よりも「状況の定義」論としての『フレーム分析』の含意を取りこぼしてしまっている。こうした状況を受け、本稿では、第3章「トマスの『状況の定義』論」で、トマスの「状況の定義」論の検討を行い、その作業を踏まえた上で、第4章「『状況的パ-

スペクティブ』の基礎」にて、「状況の定義」論としての『フレーム分析』の特質について考察した。

まず、こうした作業を通して確認されたのは、対面的相互行為と「状況」(＝対面的相互行為の外部環境を構成する空間的環境)との生態学的な関係性を問題化するゴフマンの相互行為秩序分析というパースペクティブは、行動(あるいは、相互行為)を条件づけ、実現させている諸要素の配置としての「状況」と、当の行動との関係性を問題化したトマスのパースペクティブとその方向性を一にしているという点である。さらに、こうした共通点を通して、「状況の定義」論としての『フレーム分析』の以下のような特徴が明らかになった。まず、①人々の行動(あるいは、相互行為)を条件づけ、実現させている諸要素のうち、社会的現実に関する人々の認知(＝「状況の定義」)の問題へと議論が焦点化されている点。次に、そこで記述される人々の行動(あるいは、相互行為)と社会的現実の認知(＝「状況の定義」)との関係性において、②「状況の定義」概念自体が被説明項として設定され、説明の対象となっている点。最後に、③特定の経験領域と、そのなかで認知される社会的現実(＝「状況の定義」)の多層性との関係性を考察する新しいパースペクティブを提示している点、この三点である。『フレーム分析』は、この三つの特徴によって「状況の定義」論のなかでも、非常に特異な位置を占めるに至っている。特に、三点目の特徴は、他の「状況の定義」論のなかには存在しない『フレーム分析』独自の視角となっている。

しかし、なぜ、こうした「状況の定義」論としての『フレーム分析』の含意が、先行研究においては、きちんと検討されてこなかったのか。それは、本稿が以上に析出したような「状況の定義」論としての『フレーム分析』の特徴が、社会学上の「状況の定義」論の系譜—トマスとズナニエツキを嚆矢として、ミード、クーリー、マートン、ブルーマー等の議論—からではなく、それとは異質な理論的諸源泉から抽出されてきたものだからなのではないか。そうした問題意識に基づき、まず、第1章で、初期の著作『出会い』に所収されている「ゲームの面白さ」論文を取り上げ、その検討を行った。この「ゲームの面白さ」論文は、「フレーム」概念が初出し、かつ、人々の社会的現実に関する認知と相互行為秩序の成立、維持との関係性について論じているという意味で、『フレーム分析』を補完するような議論となっている。次に、第2章「ベイトソンのフレーム論とシュッツの多元的現実論」では、ベイトソンのフレーム論、シュッツの多元的現実論を『フレーム分析』の理論的諸源泉として位置づけ、その検討を行った。第7章「多層的現実論としての『フレーム分析』」では、それを踏まえた上で、それぞれの議論と『フレーム分析』との関係について考察し、『フレーム分析』の特質とその意義を浮き彫りにした。本稿が『フレーム分析』の理論的諸源泉として位置づけた両議論は、どれも『フレーム分析』の現実観や、問題設定、方法に直接的な影響を及ぼしている重要な議論である。そうした状況を受け、本稿では、第2章や第7章の作業を通じ、両議論と『フレーム分析』との共通点と差異点とを抽出することで、『フレーム分析』の現実観や、問題設定、方法を、シュッツの多元的現実論とは区別されるような多層的現実論として析出した。

まず、シュッツの多元的現実論、ゴフマン自身の「ゲームの面白さ」論文の検討からは、社会的現実に関する認知の問題を、①各経験領域に固有な認知メカニズムに関する問題から、②各経験領域に固有な認知メカニズムと当の経験領域のなかで認知されていく「状況の定義」(＝「ここで進行していること」)の多層性との関係性の問題へと精緻化した『フレーム分析』の方法が明らかになった。シュッツは、①の次元において「多元的現実」を語っていたが、ゴフマンからすれば、社会的現実に関する認知の問題は、①の次元のみならず、①と②の両次元の関係性のなかで問題にされるべき事柄であった。たとえば、ゴフマンは、一九三八年に放送されたオーソン・ウェルズ原作のラジオ・ドラマ『宇宙戦争』のなかで描かれた火星入襲来を、多くのアメリカ市民が、現実に行っている出来事と勘違いし、パニック

を起こしたとされる事件—いわゆる「宇宙戦争」事件—について分析している。ゴフマンは、この事件の分析を通して、ラジオを聞くという経験に固有な認知メカニズムと、人々の社会的現実に関する認知の移行—「報道」と「ドラマ」との混同—との関係性について考察を行っている。このとき、こうした認知の綻び（＝認知の移行）をデザインしているものこそが、ラジオ・フレームであるとされる。

シュッツの多元的現実論の批判的摂取によって獲得されるこの視角は、結果的に、『フレーム分析』の応用研究や、「状況の定義」論に対しても、有効な枠組みを提供することになる。『フレーム分析』の応用研究には、特定の経験領域—たとえば、医療現場での対面的相互行為、テレビ視聴、携帯電話使用、広告を読む等—に準拠しつつ、当の経験領域に特有な社会的現実に関する認知の問題を扱うものが多い。本稿が『フレーム分析』から析出した、多層的現実という分析視角がこうした応用研究に加わることで、特定の経験領域に孕まれている固有の社会的現実、その移行に関して、より精緻な分析が可能になる。加えて、既存の「状況の定義」論に対しては、社会的現実（＝「状況の定義」）の多層性という新しいパースペクティブに加え、様々な経験領域へ適用可能な諸々の分析枠組みを提供する。

ゴフマンは、バイトソンのフレーム論から『フレーム分析』の最重要概念であるフレーム概念を着想した。両者のフレームに関する議論のなかで共有されている前提は、①社会的現実、常にパラドックスや矛盾（バイトソン）、あるいは傷つきやすさ（ゴフマン）を抱え込んだ非常に脆いものであるという点、そして②社会的現実の類型や、それに支配されているコミュニケーションの類型を規定しているものがフレームであるという点、この二点である。こうした共通点を通して見えてくるのが、ゴフマンが独自に付け加えた「括弧」概念や「転換」概念に象徴的に表現されている「アクティヴィティの傷つきやすさ（vulnerability）」という発想である。本稿は、この両概念の検討を通して、社会的現実の認知に関する「傷つきやすさ」という発想、そして、その「傷つきやすさ」を契機とした社会的現実に関する認知枠組みの切り替えと、その切り替えを経路づけるフレームという発想を析出した。

3）相互行為秩序の捉え直しへ向けた枠組みの析出

本稿の第三の意義は、『フレーム分析』の検討を通じて、対面的相互行為領域に固有な認知メカニズムや規範（＝相互行為秩序）を、メディア経験をも含めた他の経験領域からの影響を踏まえつつ、捉え直す視角を析出した点である。

『フレーム分析』の重要な特徴のうちの一つに、対面的相互行為領域のみならず、メディア経験を含む様々な経験領域における社会的現実（＝「状況の定義」）の認知に関しても考察を加え、それぞれの経験を構成している認知メカニズムに共通する特性と、固有な特性の両者を記述している点があった。しかし、対面的相互行為の理論家というバイアスも手伝ってか、なぜ、『フレーム分析』で対面的相互行為以外の経験領域に関しても考察が行われたのかという点については、先行のゴフマン理論研究において、ほとんど検討がなされてこなかった。

一方、『フレーム分析』の応用研究へと目を向けた場合、そこでは、ゴフマンの枠組みを対面的相互行為以外の経験領域へも適用しようとする試みが既になされていることに気づく。たとえば、先に言及したメイロウィッツの試みがそうであった。しかし、こうした応用研究には、それぞれの経験領域の分析が、結果として、対面的相互行為に固有な認知メカニズムや、規範の捉え直しにとってどういう意味をもつのか—ひいては、ゴフマンの相互行為秩序論がどのような組み替えを迫られているのか—という視角を欠如させている。

こうした問題状況を受け、本稿では、まず、第4章で、『フレーム分析』における「括弧入れ」概念を取り上げ、ゴフマンの「状況的パースペクティブ」を対面的相互行為領域に限定せず、他の経験領域

にも適用可能なものとして展開していく際の分析枠組みとして位置づけた。『フレーム分析』で展開されている社会的現実の認知に関する分析枠組みは、特定の経験領域内のみならず、複数の経験領域間にも適用され得る枠組みとしてデザインされている。ゴフマンは、異なる経験領域間で展開される社会的現実や、その移行に関わる問題として、「翻案」の問題や、テレビの中のパフォーマーに反応するだけでなく、パフォーマーに直接働きかける一話しかけ、たしなめ、おだて、その質問に直接的に答える—テレビ視聴者の例を挙げている。ゴフマンは、このテレビ視聴者の例を、メディアのなかの「ここで進行していること」(=「状況の定義」)とオーディエンスとを隔てている距離がなくなって、オーディエンスがメディアのなかの「状況の定義」に対し、対面的に「関与」してしまう事態として分析している。こうした分析から分かるように、『フレーム分析』の一連の分析枠組みは、対面的相互行為領域とそれ以外の様々な経験領域との相互的な影響関係のなかで社会的現実を捉える際にも、有効な枠組みとして位置づけることが可能である。こうした視角も、『フレーム分析』独自の視角である。

加えて、第5章、第6章「『状況的パースペクティブ』による相互行為秩序論の展開」では、オーディエンスが、社会的現実を認知する際の認知の綻びという観点から、他の経験領域に固有な認知メカニズムとの比較を踏まえつつ、対面的相互行為に固有な認知メカニズムを再画定する。ゴフマンの視角を析出した。こうした作業は、先行するゴフマンの理論研究に対しても、今まで指摘されることのなかった、対面的相互行為に限定されない「状況的パースペクティブ」の可能性を、ゴフマン理論内在的に導き出すという貢献をなすものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、20世紀の代表的な社会学者の一人 E. ゴフマンの「フレーム分析」を内在的に読み解くことをとおして、その理論的意義を明らかにしようとしたものである。

序章では、本論文の基本的課題として三つの課題が設定される。

第Ⅰ部では、フレーム分析を説明するための予備的議論として、フレーム分析以前のゴフマン理論と、フレーム分析に関連する先行理論が取り上げられる。第1章では、ゴフマン理論の基本的課題が相互行為秩序の解明にあり、フレーム分析の萌芽がすでに前期の論文「ゲームの面白さ」に見いだされることが述べられる。第2章では、バイトソンのフレーム論、シュッツおよびジェームズの多元的現実論の内容が説明される。第3章では、トマス状況定義論が取りあげられ、トマスにとって「状況の定義」が説明の対象ではなく、別の対象を説明するための概念であったことが述べられる。

第Ⅱ部では、「相互行為参加者が自らを取り巻く状況に対して同一の理解に達するのはなぜか」という、フレーム分析の基本的問題が設定され、ゴフマンが状況の定義を「フレーム」概念を使ってどのように説明したのかが明らかにされる。第4章では、フレームが生活動としての「アクティヴィティ」に「調性」を付与することによって状況の定義を可能にするとともに、「転換・転調」といったフレーム間の関係をつうじて絶えず別の状況定義に移行してしまう「傷つきやすさ」をもっていることが述べられる。第5章では、フレーム分析における「人—役割図式」が前期ゴフマンの相互行為儀礼論の理論的展開になっていることが示される。第6章では、相互行為における認知の仕組みを解き明かしたフレーム分析があらゆるメディア経験に適用可能であるとともに、対面的相互行為に固有の原理を析出する可能性を秘めていること、そうした意味で相互行為秩序論の基礎理論であることが述べられる。第7章では、ゴフマンのフレーム分析がフレーム間の動態的な関係を認識したこと、またいかなる認知も特

定のフレームを介して成り立つことを主張した点でベイトソンのフレーム論やシュッツの多元的現実論と異なることが示される。終章では、論文全体を要約したうえで、本論文の意義と残された課題が述べられる。

ゴフマンのフレーム分析は、社会学を超えた広い分野で注目されているにもかかわらず、その難解さもあって、社会学では十分に検討されてこなかった。本論文は、フレーム分析を広い文脈のなかに位置づけながらその全体像を提示し、現代の複合的なメディア状況のなかでそれがもつ理論的有效性を提示した点で高く評価できる。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。